黒いサンタ危機一髪！

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒いサンタ危機一髪！

【Ｎコード】

Ｎ５３３４Ｆ

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

今年も黒いサンタ＝黒岩三太郎がやってきた。今度のターゲットはお口がお下品な保育園児のミノリちゃん。けれど良い子のお兄ちゃんタダシ君に正体を見破られて、三太郎、大ピンチ！《黒いサンタ２００８》

ミッション１（前書き）

＊ちょっとお下品ですが、子どものやることなので笑って許してやってください。

ミッション1

「うんち！」

トイレに行きたいにしてはやたらと元気のいい声が言います。

「トイレに行きたいの？」

と聞いてもやっぱり元気のいい声で

「うんち！うんち！」

と続けて大きな声で言います。タダシ君はハアーー・・とため息をつきます。ミノリちゃんは別にトイレに行きたいわけではなく、ただ「うんち！」と言いたいだけなのです。どうやら「うんち」という言葉の響きがお気に入りらしく、ミノリちゃんの通う保育園で子供たちの間でブームになっているようです。困ったものです。

夕方も遅くなって外は真っ暗になってしまいましたが、タダシ君とミノリちゃんの二人兄妹は二人きりで家でお留守番をしています。お父さんは空港で飛行機の整備の仕事をやっていて、お母さんはお医者さんで、二人ともたいてい帰りがすごく遅いのです。

お兄ちゃんのタダシ君は小学3年生で、妹のミノリちゃんは保育園の年中組、すみれ組です。

ミノリちゃんは小さくて細くて白くて髪が背中まで伸びて長く、かわいい子です。去年のあだ名は「サダ子ちゃん」でしたが、先生に禁止されてしまいました。ミノリちゃん本人も他のほとんどの子供たちもなんのことか分かってなかったので、まあ、どうでもいいですが。

ミノリちゃんはけっして悪い子ではないのですが、この「うんち！」のくちぐせにはお兄ちゃんのタダシ君は大弱りです。ミノリちゃんは何を見ても「うんち！」で、食事の時まで大喜びで言うので、お母さんに怒られています。ああ、ミノリちゃんにはもう一つくちぐせがあって、こんな時に言うのが「うそつきい！」です。自分が気に入らないことはなんでも「うそつきい！」で、これも保育園で

子供たちの誰かがはやらせたのでしょう、困ったものです。
そんなミノリちゃんのめんどうを毎日しんぼう強く見ているタダシ君は、とても良い子です。

さて、帰りの遅いお父さんお母さんを待って二人でお留守番していると・・

ピンポーン、と玄関のチャイムが鳴りました。タダシ君は「ハーイ」と玄関に行き、「どなたですか？」と聞きました。
「ごめんください。夜分遅く失礼します」
男の人です。
「わたくし、『空想科学社』のセールスマンです」
なんだ、セールスマンですか。「くうそうかがくしゃ」なんて聞いたことない怪しい会社名です。タダシ君はお母さんに教えられているとおり断りました。
「すみませんが、今うちのものが出かけておりますので、お答えできません」
セールスマンが来たら絶対に玄関のドアを開けてはいけないときつく教えられています。外の男は困ったように言いました。
「いえ、実はこの先の竹山さんの家のマサル君をおたずねしたのですが、お留守で。しかたなく帰ろうとしたのですが、恥ずかしながら、この寒さでトイレに入りたくなってしまいまして。さがしても近所に交番も公園もないようですし、申し訳ありませんがトイレを貸していただけないでしょうか？」
これはいけません！絶対に怪しいです！ぜ～～ったいに、こんな怪しい男を家の中に入れてはいけません！
男の声はとても深い響きがあって重いですが、背は大人にしてはそう高くありません。タダシ君の家の玄関のドアには縦に長い表面にこまかな凸凹のある厚いガラスが3枚並んでいて、夜で真っ黒なガラスに、白い顔の影がタダシ君の背より少し上の所に映っていま

す。
それにしてもぜ～～ったい！こんな男を中に入れてはいけません！
タダシ君は「どうぞよそをさがしてください」と追い払おうとしましたが・・、
玄関にやってきたミノリちゃんがドアを指さすと大喜びの大声で言いました。

「うんちいっ！！」

「いや、うんち・・じゃなくって、おしっこなんですが・・」
「うんちい！」
「いや、おしっこ」
「うんち！うんち！」
「おしっこだってば」
「うんち！うんち！うんちいーっ！！」
「おしっこだ！　けっしてうんちではなあ～い！」
「キャハハハハ、うんちいーっ！！」
・・・・・・
タダシ君はとっても恥ずかしくなって、玄関先で「うんちじゃない！」と言い張っている男の人にも気の毒になってしまいました。
タダシ君は仕方なく男の人にトイレを貸してあげることにしました。ああ、だいじょうぶでしょうか？・・・
ガチャンと鍵を開けてドアを横に引いて開け・・、
タダシ君はビックリして、しまった！開けるんじゃなかった！と後悔しました。
男の背がたいして高くないと思ったのは大間違い、
厚いガラス越しに顔に見えた白い影は、細い黒ひもをネクタイ代わりに蝶結びに結んだ白いシャツで、胸元に見えるその白以外は帽子をかぶった頭の上から革靴の先まで、全身黒ずくめでした。しかも！

男はずうっとおしっこをがまんしていたようで、またの間を押さえて背を丸めていました。それで下に下がった白い胸元が、腕を寄せたしわと蝶ネクタイでちょうど顔に見えたのです。
本当は、男は山のように大きな大男でした！　本当の顔は下半分が真っ黒なかたそうなヒゲにおおわれています。
男はタダシ君にのしかかるように
「しつれい！」
とせっぱ詰まった様子で中に入ってきて、慌てて靴を脱ぎ散らかして廊下に上がり、きょろきょろトイレをさがし、ミノリに
「うんちい！」
と指さして教えてもらい、
「・・かたじけない」
と苦々しく言ってトイレに小走りで向かいました。
バタンとドアが閉まり、しばらくしてジャーッと水の流れる音がして、男はすっきりした様子で出てきました。
「いや、どうもありがとうございました。おかげさまで助かりました」
男はずいぶん礼儀正しくきちんとしたおじぎをしました。ミノリちゃんは大きな男の顔を下から覗き込み、
「うんち？　ねえ、うんちしたあ？」
と疑いのまなざしでききました。５歳なのでなかなか悪知恵が働きます。
黒い大男はミノリちゃんをジロリとにらみ、

ニカッ、と白い歯を覗かせて笑いました。

「ハッハッハッ。これは愉快なお嬢ちゃんだ。お嬢ちゃんは、マサル君と同じ保育園のミノリちゃんだね？」
ミノリちゃんは不思議そうに
「うんちのマサル君？」

と言いました。どうやら保育園で「うんち」をはやらせたのは竹山さんちのマサル君のようです。マサル君は年長ゆり組です。

「そうだ、そのうんちのマサル君だ」

男はますます大きく怪しい笑いを浮かべて言いました。そして、

「ふっふっふ、君はなかなか見込みがあるね？　よし決めた！　これも何かの縁だ、商品のテストを君にお願いすることにしよう！」

ちょっと待ちたまえ、と、黒い大男はタダシ君が早く帰ってくれるようにわざと開けておいた玄関の外に置いておいた大きな荷物を廊下に運び上げました。今度はきちんと靴を揃えて脱ぎました。

「タダシ君。すみませんがお部屋をはいしゃくさせていただけませんか？」

タダシ君はすごく困りました。

「駄目です。あなたにはトイレを貸してあげただけです。もう帰ってください」

しかし大男はとりあいません。大きな手を広げて、まあまあ、

「だいじょうぶですよ、わたくしはセールスマンではありますが、今回は商品のテストとアンケートをお願いに来たのです。もちろんちゃんとお礼はいたします。ちゃーんとけいやく書も用意してありますから、お父さんお母さんによく読んでいただいて、テスト品の回収の時までにサインしていただければけっこう。サインしていただけなければけいやくはすべて無効です。それで安心でしょう？」

と言いました。いくらお利口でも小学3年生では大人の難しい話は分かりません。

「お礼は、こちらのカタログからどれでも好きなものを選んでいただけます」

と、大男はカバンからぶ厚いカタログ本を出して、ミノリちゃんに預けました。ミノリちゃんはきらびやかなオモチャの表紙に目を輝かせて、床に置いてさっそく眺めだしました。妹を買収されてタダシ君はムッとしましたが、チラリとのぞくとカタログには自分の欲しいオモチャものっていて、思わず口を半分開いてしまいました。

「ああ、タダシ君もよろしかったらアンケートにお答えください。もちろん、お礼は差し上げますよ？」
タダシ君は、え、自分も！？とビックリしました。
黒い大男はタダシ君を見てニヤリ大きく笑いました。
「お邪魔してよろしいかな？」
タダシ君は黒いセールスマンを部屋に通してやりました。

ミッション2

「ではあらためまして。わたくし、『空想科学社』の黒岩三太郎（くろいわさんたろう）ともうします。どうぞよろしく」

黒いセールスマン＝黒岩三太郎はじゅうたんの上に正座して、タダシ君とミノリちゃんにていねいに名刺を差し出しました。タダシ君とミノリちゃんも正座して、差し出された名刺を珍しそうにのぞき込みました。子供が大人から名刺をもらうなんてめったにありません。

「ま、ま、脚をくずしてどうぞお楽に」

三太郎に言われてミノリちゃんはピョンと脚をほうり出しました。タダシ君は三太郎が正座したままなので自分もじっと我慢しました。

「さてさて、お試ししていただいて、アンケートにお答え願いたいのはこちらの商品、」

と、黒い頑丈そうな四角い箱から、角の生えた、丸いマンガの顔をしたトナカイの首を取り出しました。

「『ブレイン・リフレッシュ・ドリーム・マシーン・バージョン2』です。バージョン1との変更点は・・初めてお使いいただくお客様にはどうでもよろしいですな。

このブレイン・リフレッシュ・ドリーム・マシーン・バージョン2・・面倒なので以下ドリームマシーンは、優しい音楽で眠っている間に使用者の精神状態をおだやかにし、芯が通っていながら幅の広い柔軟な心をはぐくむという・・ようするに、汚い言葉を平気で連発する悪い子ちゃんを良い子ちゃんにしてしまうという、実に画期的な商品なのです！」

ミノリちゃんは「おおー」と感心していますが、絶対に何も分かっていません。タダシ君はこんな間抜けなマンガのオモチャにそんなすごい性能があるものかと疑いました。

「お試しいただく期間はこれから2週間」

これから2週間というと、12月24日、クリスマスイブまでです。

「お試しいただいた上で、こちらのアンケートにお答えください」

と、数十ページもありそうな白い本を2部取りだしてタダシ君に渡しました。ミノリちゃんが1部ひっつかんでパラパラしましたが、

「絵がなーい」

とすぐに放り捨てました。三太郎は笑って、

「お母さんに読んでもらってください」

と言いました。タダシ君もパラパラめくってみましたが、「ふだん夢は見ますか？」「友だちはいますか？何人いますか？」「ふだんどんな遊びをしていますか？」「夕飯は家族といっしょに取りますか？」「学校での出来事を両親に話しますか？」「お父さんお母さんの仕事を知っていますか？」などなど、これを全部答えなければならないの？とうんざりするほどたくさんあります。なるほど、思ったより本格的で、お礼のオモチャをもらうのはたいへんなようです。途中から黄緑の紙に変わって、「ドリームマシーンを使った感じについて」の質問になり、これは「どんな夢を見ましたか？」

「どんな場所に行きましたか？」「あなたはどんな姿をしていましたか？」「あなたはどんなことをしましたか？」と、自分で内容を書かなくてはなりません。これはミノリちゃんの答えを聞いて書くお母さんもすごく苦労しそうです。最後はピンクの紙に変わって、これは質問はちょっとです。「ドリームマシーンを使って楽しかったですか？」「ご希望のプレゼントはなんですか？」そして一番最後の質問。

「あなたはサンタクロースを信じますか？」

これが最後の質問？とタダシ君が変に思うと、それを見た三太郎がニコニコして質問しました。

「どうです？　あなたはサンタクロースを信じますか？」

「サンタクロース？」
無邪気な顔を上げるミノリちゃんを見てタダシ君は答えました。
「ええ。信じてますよ」
三太郎はひげ面をニイーッと大きく笑わせて実に満足そうにうなずきました。
「そうですか、そうですか。あなたはサンタを信じますか。それはそれは。あなたはとても良い子ですねえー」
なんでこんな嬉しそうな（気味悪い）顔をするのでしょう？　そういえばこのドリームマシーンはトナカイの顔をしています。もしかしたら「空想科学社」はサンタクロースを会社のキャラクターにしているのかもしれません。
三太郎はミノリちゃんにもききました。
「お嬢ちゃんはサンタクロースを信じていますか？」
ミノリちゃんは大きな丸い目をキラキラさせて言いました。
「うんっ！」
三太郎は今度も実に実に嬉しそうに笑いました。
「そうですか、そうですか。君もとってもいい子だねえー」
うっふっふっふっふっ、と、この大男の笑い顔はとっても気味が悪いです。

「さて、このマシーンの使い方ですが、いたって簡単、夜寝るときに枕元に置き、この赤鼻を押してくだされば オーケー。マシーンが光り、心地よい音楽が流れ、あなたを夢の世界へ誘（いざな）ってくれます」
ミノリちゃんが「光るのお！？」と目を輝かせました。
「光りますとも。今夜からさっそくお使いください。うっふっふっふっ」
大乗り気のミノリちゃんに対してタダシ君の方は心配です。
「あのー・・、使ってみて、よくなかった場合はどうです？　そのー・・」

「ああ、マシーンがお気に召さない、合わない場合ですか？」
「はい・・」
「その場合は、」
三太郎はけいやく書といっしょに一枚のハガキをよこしました。
「まずは契約書。お父さんお母さんに読んでもらってください。ハガキは、テストを途中でやめたい場合、２週間のうちいつでもポストに投函していただければ、ただちにマシーンを回収させていただきます。その場合もちろん契約はいっさいなかったこととし、中途解約のペナルティーはいっさいありません。なお使用中の事故、健康被害、不具合等の我が社の責任につきましては・・まあ、面倒なことはご両親に契約書を読んでもらってください」
タダシ君はハガキを見ました。宛名に、

「９９９－９９ＳＦ
木の葉堤（このはつつみ）
空想科学社　日本本社」

とあります。こんなマンガみたいな郵便番号見たことありません。怪しいです。
「それでは、何か他にご質問は？」
「いえ。ないです」
「はい。それではどうぞよろしくお願いします」
三太郎はていねいにお辞儀して、タダシ君もまねてお辞儀を返しました。三太郎が立ち上がったのでタダシ君はほっとしました。
玄関まで送っていって、
「どうもお邪魔しました。それではまた、後ほど、お会いいたしましょう」
「バイバイ、うんちい」
「うんちじゃありませんが、さようなら」
黒岩三太郎は名前のように黒い岩の固まりのような大男です。顔

の下半分は真っ黒な硬いヒゲですし、帽子を脱いだ頭も硬そうな真っ黒な髪の毛を後ろにきれいにとかし付けています。ワシのくちばしみたいな鼻をして、真っ黒でまっすぐで図太いまゆげをして、定規で線を引いたような目をしています。真っ黒な背広に真っ黒なコートを着て、本当に全身黒ずくめです。タダシ君はその姿が怖くて仕方ないのに、妹のミノリちゃんはぜんぜん怖がらないでニコニコ笑って手を振っています。三太郎も怖い顔をニイーッと怖く笑わせて、手を振ると、

「失礼いたしました」

と、玄関のドアを閉めました。タダシ君は慌てて玄関に下りると大急ぎでガチャンと鍵を下ろしました。

あー、怖かった・・。

考えれば考えるほど怪しい男です。

警察にしらせた方がいいだろうか？と考えてしまうほどです。

ともかく部屋に帰ってドリームマシーンといっしょに置かれた取扱説明書を見ていると、待ちきれないミノリちゃんが「えい！」とトナカイの鼻を押してしまいました。電池は入れなくていいのかなと思っていると、

眠そうにほとんど閉じていた両目がパチッと開きました。

ポロンポロン・ポロンポロン・・

どこかで聞いたことのあるようなピアノの曲が流れてきて、トナカイは顔を振って口を歌っているようにパクパクしました。この手のプラスチックのオモチャは大きな動きをするとカタカタうるさい音がするものですが、このトナカイは実にスムーズに静かに動きます。なかなかしっかり出来たオモチャのようで、タダシ君はちょっと感心しました。目が金色にピカピカ光り、ツノも金、白、赤、青、

緑、と色を変えて光りました。
喜んで見ていたミノリちゃんは、やがて静かになってまぶたが重くなり、すぐに「スー・・」と眠ってしまいました。
「おいミノリ？　うわあ、こりゃすごい効き目だなあ」
タダシ君はミノリちゃんをよいしょと抱きかかえて二人共同の子供部屋に連れていき、押し入れから布団を出してしいてやりました。よいしょと布団に寝させて、
「おやすみ」
食事はすませてあるのでうるさいミノリちゃんがさっさと寝てくれてタダシ君はもうけた気分です。
居間に戻ってくるとトナカイはまだ歌ってピカピカ光っていました。鼻のスイッチを押しましたが止まりません。どうやら一度押してしまったら朝まで止まらないようです。目の色が金色から青色に変わっています。
タダシ君は迷惑なオモチャだなあと思いましたが、音楽を聴いているうち、自分まで目がトロンとしてきてしまいました。いけないいけないとさっさと子供部屋に運びました。ミノリちゃんはもうぐっすりです。

タダシ君は一人でのんびりゆっくりお風呂に入りました。ああ今日も1日たいへんだったなあなんて大人みたいな事を考えて。
ふと思いつきました。
あの黒い大男、やっぱり怪しいです。
オモチャにしてはやたらと強力な睡眠効果、もしかして、両親の帰りの遅い家の子供たちを眠らせてそのすきに泥棒に入るつもりじゃないでしょうか？
そう考えたらゆっくりお風呂につかっている場合じゃなく、タダシ君は急いで上がると、野球のバットを持って、一番泥棒が入ってきそうな台所の裏口の前に座りました。
バットを抱えてじいー・・っと神経を研ぎ澄まし、あの大男がこ

っそり入ってくるのを待ちかまえました。
あんな大きな男が本当に泥棒に入ってきたら怖いなあ・・
そう思いながら、お風呂上がりのホカホカ温かい心地よさで、つい
いつい、ウトウトしてしまいました・・・・。

ミッション3

朝起きるとタダシ君はミノリちゃんと並んで布団に寝ていました。トナカイはもう光っていません。ミノリちゃんはご機嫌の寝顔でだらしなくよだれをたらして「へへへえ～」と笑っています。

起きていくと台所でお母さんが朝食の支度をしていました。

「お母さん、おはよう」

「はい、おはよう」

お母さんは包丁の手を止めて眠そうに大あくびしました。

「きのうも遅かったの？」

「ええ。なんだかどんどん忙しくなっていくみたいで、まったく、困ったものだわ」

気を取り直してまた包丁で野菜をトントンと切っていきます。

お母さんは小児科、子供の病気を診るお医者さんです。テレビでやっていましたが今小児科のお医者さんがどんどん減っていて、とても困っているのだそうです。

「お父さんは？」

「まだ大いびきよ」

笑って言いました。お父さんは空港で飛行機の整備の仕事をしていて、朝早い日と夜遅い日があるのです。

「あ、そうそう」

お母さんがまた包丁を止めて言いました。

「タダシ。あんたなんで台所でバット抱えて寝ていたの？」

タダシ君は眠ってしまったのを恥ずかしく思いましたが、泥棒には入られなかったようなのでほっとして、昨日の夜やってきた黒いセールスマンとトナカイのドリームマシーンのことを話しました。お母さんはフンフンと聞きながら手早くみそ汁の支度をしていきます。聞き終わるとちょうどナベにふたをして、タダシ君の顔を見ました。

「タダシ。お母さんたちの留守中に知らない人を入れてはいけないって言ったでしょ？」
「分かってるよ。でも・・」
「ま、おしっこじゃ仕方ないか。はい、以後気を付けるように。
・・ふうーん、２週間のテストか・・。２週間後って言うと、ちょうどクリスマスイブねえ・・」
カレンダーを見ながらお母さんはなんだかとても言いづらそうにして、タダシ君に言いました。
「クリスマスイブなんだけどね、お母さん、どうしても夜帰ってこられなくなっちゃったのよ。どうしても人手が足りなくてね」
「夜勤はなしなんじゃなかったの？」
「うん・・、そうなんだけどね・・・、その日だけはどうしても人がいないの。ごめんなさい！　・・クリスマスパーティーは２５日にしましょう？ね？」
お母さんに手を合わせられてタダシ君も「うん、わかった」と言いました。本当はとっても不満だったのですが・・。

タダシ君はお母さんに言われてミノリちゃんを起こしに行きました。ミノリちゃんはむにゃむにゃ言って起きるなり、
「あ・・、うんちは？」
と寝ぼけて言いました。タダシ君は「こーら」と叱ってミノリちゃんを着替えさせました。
「そんなにうんちが好きならミノリもうんちになっちゃいな」
と言うと、ミノリちゃんはタダシ君に抱きついてきました。
「お兄ちゃんもうんちだあ！」
とケタケタ大笑い。
「はなれろ、うんちっ子」
「わーい、うんちだぞお～」
とドタバタ騒いでいるとお母さんがやってきてコツンとタダシ君にげんこつしました。もちろん形だけですが。

「ほら、馬鹿言ってないでさっさとうがいしてらっしゃい！」
ミノリちゃんはピューと走っていきました。お母さんに叱られて良い子のタダシ君はガ～～ンとショックです。

お父さんはまだ大いびきをかいて寝てるので、３人でテーブルについて朝ご飯を食べ始めました。
テレビでニュースをやっています。
『昨夜から今朝にかけてデパートの前のライオンの置物やファーストフード店の看板の人形に、金色のソフトクリームのような物がかぶせられているのが発見されて大騒ぎになっています。この金色のソフトクリームのような物は純金と見られ、昨夜都内で相次いだ銀行の金庫から金塊が盗まれた大規模窃盗事件との関連が調べられています。昨夜都内で連続した金塊窃盗事件は現在のところ犯人及び犯行の手段などまったく分かっておらず、警察当局は・・』
その有名な一流デパートの前の大きなライオンの像が映し出されると、その頭の上には帽子のようにこんもりした大きな金色のソフトクリームのような物が乗っています。次にフライドチキンの有名なメガネのおじさんのお人形が映ると、おじさんの頭の上にも同じ形の金色のソフトクリームのような物が乗っています。周りに人が大勢集まってパシャパシャ写真を撮っています。
こんもり盛り上がった金色の物は、たしかにソフトクリームと言えば言えますが、それより・・・・・・・・
ミノリちゃんが大喜びでテレビを指さして大声で言いました。
「あっ！　うんちぃーっ！！」
あーあ・・。
「こら！」
とお母さんは怒ってテレビを消してしまいました。ミノリちゃんは「ぶ～～」と文句を言いましたがお母さんは知らんぷりです。
それにしても、変な事件です。

ドリームマシーンですが、ミノリちゃんはすっかり気に入ったようで「買って！」と言いました。すぐ眠ってしまったくせに気に入るも何もないでしょうが、「こんなどこの会社か分からない怪しい物、さっさと返しちゃいましょう？」と言うお母さんに「買って買って買ってえ～！」とダダをこね、「2週間したらオモチャと交換してもらえるから」と、けっきょく2週間テストを続けることになってしまいました。

1週間がたちました。

この間ずっと「銀行金塊盗難事件」と「黄金ソフトクリーム帽子事件」は毎日発生し、タダシ君のクラスでも「犯人はどんなすごい大泥棒だろう？」と話題になりました。テレビの騒ぎもたいへんです。なにしろ犯人はおろか、どうやって警戒厳重な銀行の金庫から大量の金塊を盗み出し、どうしてせっかく盗み出した金塊を、どうやって溶かして「ソフトクリーム」にしてライオンやフライドチキンおじさんや遊園地のお城のてっぺんやキャラクターやおしゃれな看板に帽子をかぶせていくのか？さっぱり分からないのです。目撃者は一人もおらず、手がかりは何一つなく、警察の偉い人たちは頭を抱えていました。

夜になると日本中の銀行に警官が厳重な警備につき、昼間も刑事たちが血眼（ちまなこ）になって犯人を捜し回りました。けれどその甲斐なく、事件は起こり、やっぱりなんの手がかりも見つけられないのでした。警察は面目丸つぶれです。

お母さんが忙しくてお父さんも寝てるとき、タダシ君が学校に行くついでにミノリちゃんを保育園に送っていきます。すると顔なじみの先生が困った顔でタダシ君に「ミノリちゃんの『うんち』はまだ治りませんか？」と笑って言いました。どうやら他の子供たちは

とっくに飽きて卒業して、いまだに「うんち！」を言っているのはミノリちゃん一人だけのようです。まったく、女の子なのに。ちなみに今園児たちのブームは「ムゲン」だそうですけれど、これはミノリちゃんのお気に召さないようで、タダシ君は聞いたことありません。

タダシ君はどうしてミノリちゃんだけうんちが治らないんだろう？と思いました。ストレスでしょうか？

帰りに迎えに行くと、

「うんち、うんち、お日様うんち、キラキラうんち、ピカピカうんち」

と楽しそうに大声で歌っていて、他のお迎えのお母さんたちに笑われてタダシ君はすご～～～く、恥ずかしい思いをしました。

「ミノリいー、お願いだからその歌はやめてくれないか？」

と言ってもかわいく笑って

「うんちい？」

と言うばかりです。

タダシ君は大きくため息をついて、ハテナ？と思いました。

ミノリちゃんが歌っていたキラキラピカピカうんちって、もしかしたら「黄金ソフトクリーム」のことでしょうか？

しかし家ではミノリちゃんが「うんち！」と大騒ぎするので事件のニュースがあるとさっさとテレビを消してしまうのです。

どこで見たのでしょう？

その夜も遅いお父さんお母さんを待って二人で留守番をしていました。

タダシ君がトイレでおしっこをしているときです、コツコツとガラス窓を叩くものがあります。枯れ枝か何かが引っかかっているのかなと開けてみると・・、

「わっ！」

ビックリしました。そこにあの黒い大男、黒岩三太郎が立ってい

ました。
「夜分遅くこんな所から失礼。実は君に内密にお願いがあるのです」
「な、なんですか？」
「実は、たいへん申し訳ないのだが、ドリームマシーンを回収させてはもらえないだろうか？　契約途中の一方的な申し入れでまことに申し訳ないのだが、是非、お願いします」
　三太郎はていねいに頭を下げて、実に困り切った顔でタダシ君を見ました。
「どうしてです？　理由を教えてください」
「理由は、それは、その・・」
　三太郎はしどろもどろに弱り切りました。
「理由は・・言えんのだよ。頼む！この通り！　ドリームマシーンをミノリちゃんから取り返してくれたまえ！」
　両手を合わせてお願いされて、タダシ君は三太郎にとって実にまずいことがおこったのだなと思いました。思いましたが・・
「いいですよ。ちゃんと理由を教えてくれればね。でも理由を教えてくれなきゃ、駄目です」
　と断りました。三太郎は実に苦々しく、恨めしそうにタダシ君を見て、ハアーー、とガックリ肩を落としました。
「ああ、まったく、俺としたことがとんだ大ドジふんじまったぜ。ああ、まったく、今年のクリスマスはさんざんだ」
　とこぼして、とぼとぼ歩いていきました。
　怪しいです。
　ミノリちゃんはドリームマシーンで眠っているだけです。いつも眠りながらニヤニヤ笑って「うんちいー・・」と寝言を言って「キャハハハハ」とけたたましい笑い声を上げたりしますが。
　・・その夢と何か関係があるんでしょうか？
　タダシ君は一生懸命考えました。どうして三太郎はミノリちゃんの見ている夢を知っているのでしょう？　もしかしたらドリームマシーンとは、子供が見ている夢を吸い取ってどこかに電波で送って

いるのかもしれません。
三太郎はもしかしたらテレビのヒーローものの敵の、悪の組織の一員なのかもしれません。子供たちの夢を吸い取ってその夢の力で地球を征服しようとしているのかもしれません！

というのはさすがに考えすぎで、小学3年生のタダシ君はとっくにそんな子供っぽい特撮番組卒業しています。
タダシ君は翌日の午後、お父さんにミノリちゃんを任せて郵便局に行きました。
局員のおじさんにハガキを見せてききました。
「この住所は本当にあるでしょうか？」
それは三太郎が2週間以内に契約を解除したいときに出すようにと置いていったハガキです。
おじさんはじっと読んで、
「こんな郵便番号はないね。この住所はでたらめだよ」
と言いました。やっぱり。
でも、
「いや、待てよ、どこかで見たような気がするぞ。それも最近よく・・」
おじさんは何か思い当たるものがあるようで、宙を見て考えました。
「あっ、エアメールだ！」
と思い出しました。
「エアメールってなんです？」
「航空便。飛行機で運ぶ外国宛ての郵便だよ。そうそう思い出した、これはサンタクロースの住所だよ！」
「えっ！サンタクロースに住所があるんですか！？」
「ああ。えーと、

ＪＯＵＬＰＵＫＫＩ

SF－99999
KORVATUNTURI
FINLAND

ヨウルプッキ
SF－99999
コルヴァチュンチュリ（かな？）
フィンランド

っていうのがサンタクロースのフィンランドのおうちの住所なんだ。
ヨウルプッキっていうのがフィンランドのサンタクロースの呼び方だ。
えーと・・、

999－99SF
木の葉堤（このはつつみ）

か。
コルヴァチュンチュリをコノハツツミとは、しゃれてるな。
住所そのものはない・・はずだけど、空想科学社とは、なかなか考えたじゃないか」
おじさんははっはっはっはっと笑ってウケてます。タダシ君はききました。
「その住所に手紙を出すと本当にサンタさんに届くんですか？」
「ああ、本当に届くよ。今年は・・もう間に合わないけど、来年になったら君も出してみるといい。本物のサンタクロースから返事が届くかもしれないよ？」
おじさんは愛想良くニコニコしてハガキを返しました。頭のいいタダシ君はそれが本物のサンタクロースのわけないと思いました。

どうせ観光客相手のにせ者に決まってます。
でも、
どうやら黒岩三太郎一味はサンタクロースの名をかたって悪巧みをしているようです。
サンタクロースの名前を悪いことに利用するなんて許せません！
よーし、今夜は自分もミノリといっしょにドリームマシーンで眠ってみよう、
と、タダシ君は思いました。

ミッション4

ドリームマシーンのおかげでミノリちゃんはこのところすごく良い子になって夜はすぐに布団に入ります。今日はタダシ君もいっしょにとなりの布団に入って、ミノリちゃんにききました。
「ねえミノリ。ミノリはいつもどんな夢を見てるの？」
ミノリちゃんは元気に答えました。
「うんち！」
ハイハイ、とタダシ君はそれ以上きくのをやめました。
トナカイの鼻を押して、目が開き、音楽が流れ出します。
「おやすみ」
「おやすみなさい。今日はお兄ちゃんもいっしょだね？」
「うん、そうだよ。おやすみ」
「おやすみなさい」
目を閉じると、なんだかオーロラが見えるようです。
音楽がゆっくりになったり速くなったり、微妙にゆらめいて・・・
ミノリちゃんもタダシ君も夢の世界に入っていきました・・・・。

目が開くと、白い天井に黒いクレヨンで奥に向かって太い線が2本引かれています。いえ、それはどうやら天井と壁の接した角のようで、白い壁にはびっしりと、これもクレヨンで線を描かれた、ふたの付いた棚が並んでいます。なんでいちいち物の輪郭にクレヨンの線が描かれているのでしょう？　それもきれいにまっすぐの線ではなく、ぶっとく、よれよれの、子供の落書きのような線です。
変な部屋だなあと思っていると、細長い部屋の奥の壁に、でーんと、クレヨンで描かれた灰色の金庫の丸いふたがあります。
タダシ君がまじまじと見ていると、

「うんち！」

突然目の前で大声がして、タダシ君はビックリして後ろにひっくり返りました。

「きゃはははははは」

と女の子の大喜びする笑い声が、やはり同じ目の前の空中から響いてきます。

「ミノリ！　おまえだな？　どこにいるんだ？　姿が見えないぞ？」

タダシ君が言うと、目の前に突然丸い黒い物が現れ、キラッと光りました。ガラスの、カメラのレンズです。それもタダシ君の顔と同じくらい大きな。続いて虹色の動物の体のような物が現れ、それにまたがるミノリちゃんが現れました。

「ミノリ！」

「ばあっ」

お兄ちゃんを驚かしてミノリちゃんは大得意です。

タダシ君はレンズの顔をした虹色のライオンみたいな動物をおっかなびっくりよけるようにしてミノリちゃんのとなりに回り込みました。

「ミノリ。おまえの乗ってる、これ、なんだ？」

「虹太郎！　あたしの友だちだよ」

「ふうーん・・」

どうやらタダシ君はミノリちゃんの夢の世界に紛れ込んでしまったようで、この変な動物もミノリちゃんの夢の産物なのでしょう。それにしては周りの景色と違ってクレヨンの輪郭じゃない、リアルな姿をしていますが。ずいぶん大きなやつで、タダシ君の背と同じだけあり、カメラのレンズの顔にふさふさのたてがみがあり、体はライオンの形をした、プラスチックのロボットです。口がないので噛みつかれる心配はなさそうですが、太い足はすごく力がありそうです。

「よお、お兄ちゃんも来ちまったか」

黒岩三太郎です！　相変わらずの黒いコート姿です。
三太郎はトイレの窓から見せた困った顔でミノリちゃんに頼みました。
「なあお嬢ちゃん。頼むよ、いいかげんそいつを返してくれねえか？」
ミノリちゃんは
「アッカンベー、ベロベロベー」
とお得意のやつをやりました。
カメラのライオンが金庫の方を向きました。
ジーー・・ジジ・・ジーーー、
と、顔の中で音がして、レンズの中で奥のレンズが2重3重に微妙な距離調整をしています。
するとそれに合わせて金庫の灰色の扉が薄くなって扉の向こうが透けて見えました。
扉の向こうの部屋には、なんと、黄金に輝く金塊のピラミッドがありました！・・クレヨンで描いた金塊ですが・・。

カシャッ。

カメラのシャッターを切る音がすると、なんと、黄金のピラミッドが丸ごとパッと消えてしまいました。
ライオンがジージー言うと、金庫の扉がまた見えだして、元通りになりました。
「驚いたか？」
三太郎が得意げに言いました。
「こいつはカメラ＋ライオン＋カメレオンでカメライオンだ。
こいつに写された物はこいつの腹の中に入っちまう。そしてこの」
三太郎はカメライオンのしっぽを捕まえようとしましたが、カメライオンはさっと逃げてしまいました。ミノリちゃんがアッカンベーとやって、三太郎はいまいましそうににらみながら説明を続けま

した。
「そのＵＳＢ端子」
カメライオンのしっぽはパソコンにつなぐコードの形をしています。
「をサンタランドのデジタル立体プリンターにつなぐと、元の姿のまま取り出せるって優れ物だ」
どうだ？と得意顔の三太郎をタダシ君はにらみつけました。
「つまり、これで銀行から金塊を泥棒してたんだな！？」
驚いたことに、本当に三太郎は子供の夢の力を利用して泥棒を働く悪の秘密結社のメンバーだったのです！　怪人ブラックベアー。
「泥棒なんて人聞きの悪い」
三太郎はニヤニヤいやらしい笑いを浮かべて言いました。
「世界中の恵まれない子供たちにプレゼントを配るための寄付をしてもらってるのさ」
「嘘だ！　おまえはサンタクロースの名前をかたる悪者だ！」
「やれやれ」
三太郎は困って頭をかきました。
「名前をかたってんじゃねーよ。俺が、サンタクロースなのさ」
「嘘だ！　サンタクロースが泥棒なんてするか！」
「だからあ」
三太郎は大きくニタア～ッと笑いました。
「俺は黒いサンタクロースなのさ」
タダシ君はひげ面の大男の不気味な笑顔にゾッとして怖くなりました。
「お・・、おまえみたいな悪者・・、本物のサンタクロースが許しておくものか・・」
三太郎は口をひん曲げると、
「ま、やりすぎると叱られるがよ」
と眉もひん曲げてばつの悪そうな顔をしました。その様子にタダシ君は心配になりました。

「・・じゃあ、やりすぎなきゃ叱られないの？」
「ま、知らんぷりしてくれるわな。
・・フム。あのなあ、せっかくサンタからプレゼントをもらっても、一夜の夢で消えちまったらガッカリするだろう？　いくらサンタの魔法で作るにしても、材料はこの世の本物の同じだけの価値のある物でなきゃならないのさ」
「じゃあ・・本当にサンタさんがあんたに泥棒させてるんだ・・」
「だから俺たちが勝手にやって、サンタは知らんぷりしてるんだが・・。
あのよお、しょうがねえだろ？今どき森の木を切って作ったオモチャなんて子供は喜ばねえじゃねえか？　それにおまえ、地球温暖化って知ってるか？森は大切なんだぜ？」
タダシ君はショックでガッカリしてしまいました。三太郎はちょっと気の毒そうにしましたが、
「ところがだ、
このお嬢ちゃんがとんでもねえ悪ガキで！」
三太郎が指さすと、難しい話に退屈してカメライオンのたてがみで遊んでいたミノリちゃんが素早く
「うんち！」
と三太郎に向かって叫びました。するとカメライオンはクルッとお尻を三太郎に向け、パカッとお尻にふたが開くと、ポンッ、と、例の黄金ソフトクリームを発射しました。三太郎は危うく頭をよけましたが、革靴の上に「べちゃ」と落ちてくっつきました。
「あー、くそ。ええーい、やめんか！」
「きゃはははははは」
ミノリちゃんは大喜びです。
「これだ」
と三太郎はタダシ君を恨めしそうににらみました。
「まったく、せっかく盗んだ金塊を、夜の街を遊び歩いて、こいつにみーんな『うんち！』させちまう」

「きゃはは、うんち！」
「ヤメッつーんじゃ！　なあ、頼む、本っ当に、いいかげんそいつを返してくれよ、な？」
「アッカンベー、ベロベロベー」
「ええーーい、こらあっ！　待ちやがれえっ！」
三太郎はとうとう顔を真っ赤に爆発させてカメライオンにつかみかかりました。カメライオンはひらりとよけて、スッと姿を消しました。
「きゃはは」
「ここかあ！」
「こっちだよお～」
ミノリちゃんだけ空中に顔を出して、
「おりゃあ！」
三太郎が飛びかかると、壁にガーンと激突して、くう～～・・と鼻を押さえました。
「きゃはは。鬼さんこちら、手の鳴る方へ～」
「待て！返せ！」
「きゃはは」
あーあ、かわいそうに、大の大男が保育園児の女の子に遊ばれています。
三太郎とミノリちゃんがドタンバタンと追いかけっこをしていると、タダシ君はきょろきょろして、何を考えているのか、おーいおーいと自分も手足を大きく振って踊り出しました。
三太郎が不思議に思って追いかけっこをタイムしてきました。
「おい、なにやってんだ？」
「警報機」
「なんだって？」
「この部屋、銀行の金庫室だろう？　どうして警報機が鳴らないんだ？」
「そ、それは・・」

「泥棒のアニメで見たけど、ふつう警報機があるものだろう？」
「ええーい、バカ、そんなこと考えるんじゃねえ！」
タダシ君は三太郎の反応を見てますますわーわー大きく踊り出しました。それを見たミノリちゃんもいっしょになってわーわー騒ぎました。
「だっかっら、なにやってんだよ？」
「こういう所には見えない光線がいっぱい通っていて、それに触れば・・」
「うわー！　バカバカバカー！　よせ！　よさねえか！！！」
「うるさい！　だまされるもんか！　おまえは悪者だ！　やっぱり本物のサンタが泥棒なんてするもんか！」
三太郎は悲鳴のように叫びました。
「よせ、やめろおーーーーっ！！！」

ジリリリリリリリリリリ

けたたましい警報が鳴り響きました。
同時に、ミノリちゃんの落書きだった部屋の様子が、冷たいコンクリートの、リアルな本物の銀行の金庫室に変わりました。
けたたましい警報音と冷たい部屋の様子に、ミノリちゃんはすっかり怯えて表情が固まってしまいました。
三太郎が言いました。
「えい、くそっ。おいカメライオン！　その子をさっさと寝室に送り届けるんだ！」
カメライオンはうなずくとミノリちゃんといっしょにスッと姿を消しました。
「さて、と」
三太郎は皮肉な笑いを浮かべてタダシ君に言いました。
「どうしたもんかな？」
タダシ君はぎゅ～っと自分のほっぺたをつねりました。これは夢

の世界のお話なのです、自分が目を覚ませば、これはすべて夢の出来事、になるはずです・・
でも、ほっぺたが真っ赤になるまでつねっても、タダシ君は夢から覚めることが出来ませんでした。
タダシ君はすっかりあせって、自分は何かとんでもないまずいことをしてしまったんじゃないかと恐くなりました。
「フウーム・・。これだから良い子はブラックサンタ団には入れねえんだ」
顔を青くしているタダシ君に三太郎は言いました。
「おめえのまじめさが夢を現実にしちまったんだ。
こい。夢の力のねえ俺が使える魔法は一度きりだ」
三太郎はタダシ君をまっすぐ自分に向き合わせると、ニッと笑って言いました。
「おい兄ちゃんよ、口の汚ねえ妹と仲良くな。アバヨ」
三太郎が大きな腕を勢いよく「バッ」と広げると、

タダシ君の目の前が真っ黒になって、

自分の布団の中にいました。
あわてて起き上がってとなりを見ると、ミノリちゃんがう～んう～んとうなされながら寝言を言っています。
「う～ん・・、黒ヒゲ危機イッパツ～・・」
二人の間の枕元に置かれたドリームマシーンは光りが消え、鼻のスイッチを押しても目は開きませんでした。

ミッション5

翌日。
朝のニュースで銀行の金庫室で金塊泥棒が捕まったと大々的に報道されていました。
『捕まったのは自称夢の機械のセールスマン、黒岩三太郎３８歳です。しかしどうやって金庫室に侵入したのか不明で、盗まれた金塊も一部を除いて残っておらず、どこにどうやって持ち去ったのか不明です。共犯がいるものと見られ、警察では黒岩容疑者を厳しく追及しています。黒岩容疑者はこの数日連続している日本各地の銀行の金塊窃盗事件にも関係していると見られ、その点でも警察は・・』
タダシ君がテレビを見ているとミノリちゃんが起きてきて、テレビを見て言いました。
「黒ヒゲのおじちゃん、お巡りさんに捕まっちゃったんだ・・」
タダシ君はわざと突き放した言い方をしました。
「いいんだよ、こいつは泥棒なんだから。警察に捕まって当然なんだ」
ミノリちゃんは顔を歪ませて、
「黒ヒゲ・・・・うわああ～～～んんん」
と大声を上げて泣き出しました。うわああ～～んうわああ～ん、と、泣き声は止まりません。「どうしたの？　なにケンカしてんの？」と台所からお母さんが言いました。
タダシ君はミノリちゃんを一生懸命なだめながら、すっかり困ってしまいました。

学校に行くとクラスもこの話題で持ちきりです。
「あーあ、ルパンみたいにかっこいい泥棒だったらよかったのになー」
「見るからに悪人ヅラだったもんなー、ガッカリ」

「あの顔は日本人じゃないよな？　きっとロシア人のマフィアだぜー」
なんて好きなことを言い合ってます。タダシ君は話題の輪に入っていくことが出来ず後ろめたい気持ちでいました。

夜。
やはりドリームマシーンは鼻のスイッチを押しても動きませんでした。ミノリちゃんはぐずってなかなか眠ってくれず、子守歌をねだられてあのピアノの曲「トロイメライ」を「ターンターンタンタンター」と歌ってやって、やっと眠ってくれました。
タダシ君も眠っていると、夜中、帰ってきたはずのお母さんがまた出かけようとしているようです。玄関に出ていくと靴を履いていたお母さんが、
「あら、起こしちゃった？」
と困った笑顔で言いました。
「病院行くの？」
「うん。入院中の子が具合が悪くなっちゃって。他にお医者さんがいなくてね」
「そうなの。気を付けてね。あんまり無理しないでね？」
「うん。ありがとう。じゃ、行って来るわね」
とお母さんは出かけていきました。

朝になるとお母さんはいつものように台所で朝ご飯のしたくをしていました。
「帰ってたんだ？」
「おはよう。うん、なんとか落ち着いてね。あなたたちの朝ご飯作りに帰ってきたわ」
「そんなに無理しなくていいよ？」
「毎日の習慣ですからね、平気よ」
そう言いながらお母さんはとても疲れた青い顔色をしているので

した。タダシ君はとっても心配です。
タダシ君はききました。
「あのね、お母さん。お父さんとお母さん、クリスマスイブに僕にプレゼントくれる？」
お母さんは目を丸くしてわざとらしく言いました。
「いいえー。プレゼントしてくれるのはサンタさんでしょう？」
タダシ君もお付き合いで笑ってやって言いました。
「じゃあね、サンタさんに伝えてよ、僕のプレゼント、その入院している子にプレゼントしてって」
お母さんは本当に目を丸くして、まじめな優しい目になると手を止めてタダシ君に向き合ってききました。
「どうしたの？　だいじょうぶよ、ユウキ君・・その子にもサンタさんがちゃあんとプレゼント用意してくれてるわよ」
「じゃあ元気になるように2つプレゼントしてもらってよ。僕、その子に早く元気になってほしいんだ」
お母さんは微笑みながら、ちょっと困った顔をして、タダシ君の頭を撫でました。
「・・はい。分かりました。じゃ、サンタさんに伝えておくわね。本当にいいのね？」
「うん」

日は過ぎて、23日、クリスマスイブのイブの日になってしまいました。
夕方、またミノリちゃんと二人でお留守番していると、玄関のチャイムが鳴りました。
この時ミノリちゃんはお昼寝していました。
タダシ君は、心配事で頭がいっぱいで、ついお母さんの言いつけを忘れて相手を確認もせずに玄関のドアを開けてしまいました。
開けたとたん、タダシ君は眩しさに目が痛くなって閉じました。
まるで夕日を直接見てしまったみたいです。目を開けると、実際は

そんなに眩しいことはなく、ただ真っ赤な派手なコートの色が見えました。女の人かと思ったら・・
「いよおっ、おめえさんがタダシ君だな？」
男の、お爺さんでした。背が少し丸まってかがみ気味ですが、元はずいぶん背が高かったように感じます。今でもずいぶん元気そうで、おしゃれにトンボみたいに大きな銀色のサングラスをかけています。顔は細くしわだらけです。このお爺さんのなにより特徴的なのは、ロシア人のかぶるようなふわふわの毛の帽子の頭からブーツの足先まで、全身が真っ赤なことです。
「タダシ君だね？」
「は、はい。僕、タダシですけれど、お爺さんは？」
「お爺さんと来やがったか？　へっへっへ。おいらあ『空想科学社』から来た赤畠三之助（あかはたさんのすけ）ってえもんだ。ちょいとじゃまするぜえ」
赤畠三之助は玄関のドアを閉めました。とたんに玄関の中が怪しい秘密基地のような雰囲気になりました。

「おじさんは・・黒岩三太郎の仲間の人？」
「おうよ。部署は違うがな、まあ、同僚だわな」
「じゃあ・・おじさんも、ブラックサンタ団の一員なんだ？」
三之助はじいっと見つめるタダシ君に
「へっへっへ、なんてえツラしてやがるんでえ」
と、ものすご～く悪人っぽい笑顔になりました。
「このかっこうを見やがれってんだ。どこがブラックだよ？
おめえさん、会いたかったんだろう？サンタクロースに？
だから来てやったんじゃねえか、おうよ、おいらが、正真正銘、本物の、
赤いサンタクロースよ」
タダシ君は、「ぜったい違う」と思いました。
「あなたがサンタクロースう～～？」

「おう。まあ、今は引退してオモチャ工場の生産ラインの係長をやってるんだがな。ついこないだまでであ、ビシバシ、トナカイどもにムチをくれて世界中の夜の空をソリを走らせていたもんだぜ」
「サンタクロースは何人もいるんですか？」
「あったりめーよ。おめえさん世界中に何人の子供たちがいると思ってる？　サンタが一人きりで全部の子供を回りきれるわきゃねえだろうがよ？
　もちろんオリジナルのサンタクロースは一人きりだがよ、そのサンタ爺さんから正式に任命された公認サンタクロースが俺たちよ。イブの夜にゃあ世界中の空を俺たち公認サンタのトナカイソリが飛び回ってるんだぜえ。どうでえ、本物だろうが？」
「ええ・・まあ・・」
　でも、
「おじさんはあんまりサンタクロースっぽくないです」
「てやんでえ、ちくしょうめ、こちとら生まれも育ちも生粋（きっすい）の江戸っ子でえ！　江戸っ子がサンタになっちゃいけえねえって法でもあるのかい？」
「いや、ないです、たぶん・・」
　だから江戸っ子のべらんめえ調のサンタがサンタっぽくないと思うのですが、まあこの人本人にそれを言ってもしょうがないのでやめておきましょう。
　でも、
「僕、トナカイのソリが空を飛んでるのなんて見たことないですよ？」
「バーロー。サンタってえのはな、心から純粋に信じる子供にしか見えねえんだよ」
「はあ、すみません」
「まあいいやな。でだ、タダシ君。おめえさん、せっかくのクリスマスプレゼントを病気の子供に譲っちまったんだな？　スジガネ入りのいい子ちゃんじゃねえか？」

三之助爺さんは黒岩三太郎にも負けないニイ〜ッと悪そうな笑いを浮かべました。
三之助の銀色トンボメガネにじいっと見られてタダシ君は怖じ気（おじけ）づきそうになるのを我慢して言いました。
「代わりにサンタさんにお願いがあるんです。僕のせいで捕まった三太郎さんを助けてほしいんです」
三之助は、
「そりゃできねえ相談だな」
とあっさり断りました。タダシ君は驚いてききました。
「どうして？」
「オレァ良い子の赤サンタだぜ？　泥棒して捕まった犯罪者を助けるなんて、出来るわけねえだろうが？」
「そんなあ！　あの人はサンタクロースたちのために働いていたんでしょう？　それを見捨てるんですか！？」
「あいつがドジ踏んだのが悪りいのさ。なあに心配いらねえよ、クリスマスシーズンが終わりゃあ他の黒サンタが助け出すさ」
「他にも黒いサンタがいるの？」
「おう、世界中にいるぜ。だからな、そう心配するな」
そう言って三之助は骨張った大きな手でタダシ君の頭を撫でました。
タダシ君は、なんだか、子供扱いされてすごく腹が立ちました。
「でも・・、僕、どうしてもあの人を助けたいんです！」
「フム」
三之助はタダシ君の頭を撫でる手を引っ込めました。
「どうしてもかい？」
「はい！」
「どうなっても知らねえぜえ？」
「はい！・・」
「よーし、じゃ、こいつだ」
三之助はニヤッと悪く笑ってコートのポケットから白い布を折り

畳んだものを取りだし、廊下の板の上に広げました。大きな白い袋です。袋を1回ふわっと振って、袋の口を広げて下ろすと、何もなかったはずの中からレンガを組んだえんとつの頭が現れました。
「現代サンタの必需品さ。いまどき大きな煙突のある家なんてありゃしねえからな。こいつでどんな家の屋根でも床でも通り抜けられる」
タダシ君は感心して言いました。
「まるで『ドラえ・・」
三之助が人差し指を立てて「チッチッチッ」と振りました。
「それは言わねえ約束だぜ。
さ、行くか？」
三之助はこの煙突に入れと言っているようです。それで三太郎の捕まっている警察の留置所に行けるのでしょうか？
だったら世界中を飛び回るトナカイソリも必要じゃない気もしますが・・
三之助は「へっ」と笑いました。
「サンタは合理主義なんてでえきれえなのさ」
タダシ君は思いきってえんとつをまたいで、中に飛び込みました。

わーーーっと下に落ちたタダシ君は、
「おっと」
と、がっしりした大きな腕に受け止められました。
「おい、お兄ちゃんじゃねえか」
「三太郎さん！」
タダシ君を受け止めたのは黒岩三太郎でした。逮捕された三太郎は暗い水色の牢屋着を着せられています。そう、ここは黒い鉄の檻（おり）と冷たく硬いコンクリートの壁に囲まれた牢屋の中です。
「よお、三太郎、ざまあねえな？」
天井にポッカリ空いた黒い四角い穴から三之助がのぞいて笑っています。ケッケッケッケッ。三太郎は嫌あな渋い顔をしました。

「なんだよ、よりによって赤ハナのとっつぁんが来やがったのか？」
三之助といい三太郎といい、仮にもサンタクロースを名乗るものがどうしてこんなに口が悪いのでしょう？　その謎はこのお話には関係ありませんのでパス。
「おら、さっさと上がってこい」
「ちょっと待て」
三太郎はタダシ君を見つめて言いました。
「タダシ。おめえ何か勘違いしてねえか？」
タダシ君は何が？と分かりません。
「おめえはな、悪い金庫泥棒を捕まえて、いいことをしたんだぞ？
それに対して今おめえのしようとしていることは、悪い泥棒を逃がす、すっごい悪いことなんだぞ？　おめえそれが分かってんのか？」
タダシ君は恐い三太郎の顔をまっすぐ見つめて言いました。
「いいよ。僕はあんたを助けたいんだ」
三太郎はじいっとタダシ君を見つめて、ニッと笑いました。
「フフン、そうかい。ありがとうよ。それっ」
三太郎がジャンプすると、
煙突を飛び出して、玄関に降り立ちました。

ミッション6

昼寝から目を覚ましたミノリちゃんが玄関の声に眠い目をこすりながらやってきました。
「よお、お嬢ちゃん」
三太郎の大きな姿を見つけてミノリちゃんはパアッと顔を輝かせて駆け寄りました。
「黒ヒゲだあ！　あ、怪しい赤ジジもいるう！」
と、三之助には警戒してアニメの女の子戦士のポーズで威嚇（いかく）しました。
「へっへっへっへっ。おもしれえお嬢ちゃんだなあ」
三之助もミノリちゃんを気に入ったようです。
三太郎はミノリちゃんに言いました。
「おっかねえ牢屋からお兄ちゃんに助けてもらったんだぜ？」
ミノリちゃんはお兄ちゃんを見てニッコニコに笑いました。タダシ君はちょっと恥ずかしくてすごく誇らしい気分です。
三太郎が嬉しそうに悪人ヅラで言いました。
「よおし、今夜からブラックサンタ団活動再開だ！　おい、悪い子になっちまったタダシ。おまえも手伝うんだぞ」
ミノリちゃんの期待いっぱいの顔に見られてタダシ君は、
「うん！」
と元気に答えました。

夜。
タダシ君とミノリちゃんはそろって布団に入り、トナカイの鼻を押しました。目が開き、ピカピカ光り、ピアノの音楽が流れ出し、ツノが光って歌い出しました。
「おやすみミノリ。夢で会おうね？」
「おやすみなさーい！」

二人仲良く夢の中へ・・・

「ワハハハハハ。来たなブラックサンタども！」
ビルの屋上で、黒岩三太郎です。今日は気合いが入って自分も黒の忍者スタイルです。と思ったらタダシ君も同じ忍者スタイルで、ミノリちゃんは大好きなアニメのピュア・ブラックになっています。
空は満天の星空で、星の光がすごく強く、青紫色の空になっています。とても幻想的です。見下ろす街並みも・・ここは日本なんでしょうか？　街灯やネオンが霧ににじむようにして、とってもファンタスティックです。
「さあ仕事だ。今夜はかせぐぞお！」
「どうやって中に入るの？」
ここは銀行のビルの屋上なのでしょう。
「おい」
三太郎が呼ぶとカメライオンが虹色の姿を現しました。
「あ！　虹太郎！」
ミノリちゃんは嬉しそうにカメライオンの首にしがみついてたてがみに頬をすりすりしました。
「ピュア・ブラック。相棒といっしょに頼むぜ」
「Ｙｅｓ！」
ミノリちゃんはカメライオンに顔でお尻を持ち上げられて背中に乗り、屋上の床に
「ジージー」
カメラの照準を合わせました。コンクリートの床が透けていきます。
「行くぞ、ショウノジ。」
ショウノジというのが忍者タダシの暗号名のようで、タダシ君は「おう！」と元気に返事して、カメライオンが開けた丸い穴に飛び込みました。三太郎が飛び込み、ミノリちゃんを乗せたカメライオンが飛び込みました。

金庫室目指して５０階建てのビルを下っていきます。途中こわ～い顔をした敵（本当は正義のお巡りさん。ごめんなさい）をささっと忍者の身のこなしでかわし、カメライオンの照準のトンネルを歩くという裏技で壁の中を進み、ついに地下の金庫室に辿り着きました。

金庫室にはプロテクターを着けた敵の忍者軍団が待ちかまえていました。

「おのれくせ者！　今宵（こよい）こそ引っ捕らえてくれるぞ！」

警棒やくさりがまをかまえる忍者軍団に、

「悪いが今回は小さなお子さま連れなんでな」

と三太郎はボンッと煙玉を投げつけ、みんな簡単に眠りこけてしまいました。タダシ君はせっかくハラハラドキドキの決闘が出来るかと思ったら、簡単にけりが付いてしまってひょうしぬけしてガッカリです。でもミノリちゃんは単純に「わーいわーい」と喜んでいます。三太郎はタダシ君に言いました。

「おまえもまだお子さまだ」

タダシ君は子供扱いにムッとしましたが、三太郎はワッハッハと笑いました。

「今夜はあと４つ、銀行を攻略せにゃならん。遊んでるひまはねえってことさ」

カメライオンが金庫のドアを透かして中の金塊のピラミッドをカシャリ！　金塊をゲットしました。

「よし、ミッション１クリア！　ミッション２に移動するぜ！」

三人と一匹はまた別のビルの屋上に移動しました。

タダシ君はききました。

「ねえ、どうしてわざわざ屋上に移動するの？」

三太郎は当たり前じゃないか？という顔で言いました。

「その方が面白いだろう？　さあ、今度のステージはさっきより手強いぞ！」

タダシ君はなんだそうかと思いました。これはコンピューターゲームの潜入型ゲームなのです。大人っぽいゲームでタダシ君はまだやったことありませんが。なるほど、それは「おもしろそう」で、タダシ君はがぜんやる気が出てきました。

ミノリちゃんが大喜びで叫ぼうとしました。

「うん・・」

タダシ君と三太郎はあわてて同時にミノリちゃんの口を押さえ、なんとか金塊流出を阻止しました。

「はあ～～、あぶねえあぶねえ。こっちの罠の方にやられそうだ。さあ、行くぞ！」

ミッション2、スタート！

・・という感じで、朝日が昇ってくるまでになんとか最高レベルのミッション5の銀行の金庫から金塊の強奪に成功しました・・・・本当に悪の大泥棒になった気分です。クリスマスのサンタさんのお話なのにいいんでしょうか？

「フフフフフ、ご苦労だったな諸君」

悪の首領の三太郎が貫禄たっぷりに言います。

ミノリちゃんは疲れてカメライオンの背中でグーグー眠っています。おかげで「うん・」を言われる心配はありません。タダシ君は昇る朝日を眺めて、ああ今夜も一晩たっぷり働いたなあ、とサラリーマンのお父さんみたいな充実感を味わいました。

ところで今夜の5つの銀行の成果を振り返って、日本の銀行に果たしてピラミッドが作れるような大量の金塊があるんでしょうか？

まあ夢の世界のことなので大げさになっているのでしょう。楽しかったので文句はありません。

いっしょに朝日を眺めながら三太郎がタダシ君に言いました。

「これで今年のブラックサンタ団の仕事はおしまいだ。世話になったな」

「もう23日が明けちゃったけど、プレゼント作りは間に合うの？」

「ああ、平気だ。心配ない。
なあタダシ。
おまえの本当に欲しいプレゼントはなんだ？」
「僕は、プレゼントは他の子に譲っちゃったから今年はいらない」
「いいから、言ってみろ」
タダシ君はとなりでどっしり腕を組んでいる三太郎を見上げて言いました。
「・・クリスマスイブに・・、お父さんお母さんと、家族四人揃ってクリスマスパーティーがしたい！・・。ミノリ、いつもかわいそうなんだ、お父さんお母さんがいっつも忙しくって・・。ミノリは、本当はすごくいい子なんだ！」
三太郎は
「ハハハハハハハ」
と大笑いしました。
「なるほど、いい子か？　こいつはしまった、俺の見込み違いだ。俺は最初から間違っていたわけだな？　よし分かった、おまえのプレゼントは俺が直接サンタクロースに頼んでやる」
「ありがとう！　・・でも、僕のプレゼントはユウキ君に譲っちゃったから・・」
「おお、そうだったな。じゃあおまえさんのところに来るサンタは黒いヤツかも知れないぜ？　なあ、タダシ。ハッハッハッハッハッ」
三太郎はミノリちゃんを抱き上げるとタダシ君に預けました。
「ありがとうよ、金塊は確かにサンタランドがいただいたぜ。
それじゃ、明日の・・じゃねえ、今夜のイブを楽しみにな。アバヨ、タダシ」
三太郎がカメライオンといっしょにスッと消えると、白い朝日がまぶしくさして・・
朝布団の中で目を覚ましたタダシ君は起きていくといつも通り台

所のお母さんに挨拶しました。
「お母さん、おはよう」
「はい、おはよう。タダシは毎朝一人で起きてきていい子ねえ」
「僕、本当はいい子じゃないんだよ？」
「あら？　そおだったのお～？」
お母さんは笑って、タダシ君も笑いました。
「あのねお母さん。やっぱり今夜は帰れない？」
お母さんはとっても申し訳なさそうに言いました。
「ええ。ごめんね。やっぱり代わりの人がいなくて、お母さんが担当の入院している子、やっぱり加減がよくないのよ」
「そう・・。じゃあ、仕方ないね・・」
「ごめんね。明日は必ず！　ね？ごめんなさい！」
「いいよ。分かったよ」
お母さんはとても大事な仕事をしているのです。仕方ありません。

あっという間に夕方です。今日はお父さんも遅番（おそばん）で、帰りは真夜中過ぎです。
薄暗くなってきたのでカーテンを閉めて電気をつけて、ミノリちゃんと二人でつまらなくいつもの夕飯を食べようとしました。
すると・・

ポン・ポン・ポンポポン・・

ピアノの、「トロイメライ」が聞こえてきました。子供部屋のドリームマシーンが勝手に動き出したようです。見に行こうとすると、天井の電灯がまたたいて、消えてしまいました。驚いていると、

金、白、赤、青、緑色、

光の波がスー・・スー・・と、本当に波のように暗い部屋を走っ

ていきます。トナカイの角が光る光の色です。
ミノリちゃんはもうテーブルにつっぷして眠っています。タダシ君も立っていられなくて床に横になると、目を閉じました・・・・

目を覚ますと。

「アロハ～。ウェルカム・トゥ・ハワアイー！」

フラダンスのきれいなお姉さんにハイビスカスのレイ（花の首飾り）をかけてもらって、ほっぺたにチュッとキスされました。
タダシ君とミノリちゃんとお父さんとお母さんは、アロハシャツを着て、南の島、ハワイの空港に降り立ったところなのでした！
きれいなお姉さんにキスされてデレデレしていたお父さんがお母さんににらまれて言いました。
「えーと・・、ああそうだ、お父さん特別ボーナスで会社からハワイ一泊家族旅行がプレゼントされたんだ・・よなあ？？？」
お母さんにきくと、お父さんをにらんでいたお母さんもちょっとビックリして、
「えーーとーー、そう・・よ、ねえ？？？」
言いながら首をかしげました。
ミノリちゃんはお父さんお母さんの混乱なんておかまいなしです。
「お父さん！お母さん！　海行こう、海い！！」
とお父さんの手を引っ張りました。ミノリちゃんに思いっきり手を引っ張られたお父さんは、
「おっと。よ～～し、せっかくの南国のホリデイだ、思いっきり遊ぶかあ！？」
お母さんも、
「よーーし、お母さんもビキニ着ちゃうわよおー！　ほら、タダシ

！　行くわよ！」
と、二人とも大はしゃぎです。もちろんタダシ君も、
「僕も泳ぐ！」
駆け出しました。

真っ青な空、真っ白な砂浜、遠浅の透き通った海で、家族四人で思い切りはしゃぎ回りました。
疲れるとビーチパラソルの下で青いトロピカルジュースを飲んで、すると砂浜で黒と赤の全身水着を着た見たことのあるような二人組がイスに寝そべって日光浴をしていました。タダシ君とミノリちゃんは指さしてひそかに笑いました。
バーベキューの焼き肉を食べて、ゴーカートに乗って、馬車に乗って、お買い物をして、また海で遊んで、海に沈む大きな夕日を四人並んで眺めました。
フラダンスのショーを見ながら大きなロブスターの夕食を食べましたが、ショーにはやっぱり黒ヒゲ大男の三太郎とトンボサングラスの三之助がゲスト出演して下手くそなフラダンスでお客を笑わせました。もちろんタダシ君とミノリちゃんも大笑いしました。
とっても楽しい一日でした。
遊び疲れてくたくたです。
家族揃ってこんなに楽しかったのは何日ぶりでしょう。
ザー・・ザー・・、と、窓の外の波の音を聞きながら、タダシ君は幸せいっぱいの気持ちで眠りに落ちていきました。
その眠りに落ちていく頭の中に、三太郎の声が聞こえました。
「一夜限りの夢のプレゼントなら、ただだ」
タダシ君は幸せな気分でぐっすり眠りました。

朝起きると、タダシ君は自分の布団の中に寝ていました。
体を起こして目をこすります。となりではまだミノリちゃんがよだれをたらしてグーグー寝ています。なんとも満ち足りた寝顔です。
起きていくと、台所から上機嫌な鼻歌が聞こえてきます。
「おはよう」
挨拶すると、
「おっはよー！　ランララランララ〜〜ン。」
お母さんがどうしちゃったのかというほど上機嫌で挨拶しました。
「どうしたの？」
「うん、ユウキ君ね、もうー、だいじょうぶよお〜。危ない状態はすっかり良くなりました。しばらくすれば退院もできるでしょう！」
「そう。それはよかったね。
ところで、ねえ、僕とミノリ、夕べここで寝てなかった？」
「いいえ。ちゃあんとお行儀良く布団で寝てたわよ？」
「そう？　ねえ、ごはんは？　そのまま残ってなかった？」
「ああ！」
「え？やっぱり？」
「食べたまんまテーブルに残ってた！　水にうるかしておいてって言ったでしょう？」
「うん・・。食べてた？」
「ええ。きれいさっぱり。おかわりして」
「ああ、そう・・」
変な話です。昨日自分とミノリちゃんはここでドリームマシーンのせいで眠ってしまったのです。・・そういえばドリームマシーンは？
フンフフ〜ン、とお母さんはまた鼻歌を歌い出しました。
「どうしたの？　まだ何かあるの？」
「ムフフフフフ。実はねー、夕べお母さんねーー、ムフフフフフ」
とそこへ、
「おっはよー！」

「おはよー」
と、ミノリちゃんとお父さんが仲良く起きてきました。二人とも揃ってニコニコ顔です。
「あら二人とも珍しい。どうしたの？」
「フッフッフッフー」
お父さんが怪しく笑いました。
「父さん、実は昨日の勤務でな、仮眠中にすっごく楽しい夢見てな。あーあ、おまえたちにも見せてやりたかったなあ～～～！」
お母さんも負けじと言いました。
「あら、あたしだってそうよ。不思議よねー、ほんの少しの仮眠中に、丸1日夢の中で過ごしちゃった！　あんまり機嫌がいいんで他の先生方に気味悪がられちゃったわ」
「へー、俺もだぞ？」
タダシ君はもしやと思ってききました。
「それってもしかして・・」

「あろはおえ～～」

ミノリちゃんが手をヒラヒラ腰をクネクネさせてアロハを踊りました。
三人は目を丸くして顔を見合わせました。

「不思議だねーーーーー？」

タダシ君は笑いました。
「きっとサンタクロースがプレゼントしてくれたんだよ」
そのサンタは、黒い服を着ていたはずです。
お父さんは家族の顔を見渡して言いました。
「よし。じゃ、来年も行くか？」
「ハワイ！？」

「アロハ！？」
「海！？」
お父さんは自信満々に請け負いました。
「おう！　今度はお父さんがサンタクロースだ！」
タダシ君はミノリちゃんと顔を見合わせてニコニコ笑いました。

ところでお父さんもお母さんも財布からお金がなくなっていると大騒ぎになりましたが、夜になってクリスマスパーティーをしているところにハワイからどっさり荷物が届きました。お父さんお母さんが大喜びで買い物しまくっていたおみやげです。夢の中の話のはずが、不思議です。荷物の発送者は「空想科学社ハワイ支部」となっていました。

そう、ドリームマシーンですが、アンケート、契約書、その他もろもろ込みで、いっさい家から消え去っていました。
代わりに、ミノリちゃんにはご希望のクリスマスプレゼントが布団の中に赤い靴下の包みに入って置かれていました。
ミノリちゃんへのサンタさんからのプレゼントは、

黄金の「黒ヒゲ危機一髪！」でした。

まさか・・と思いましたが、金色はただのプラスチック塗料でした。
そういえばテレビで黒岩三太郎脱獄のニュースは大々的にやっていますが、一昨夜の銀行金庫金塊強奪事件のニュースは１つも入りません。新聞を見ても脱獄囚黒岩三太郎は顔写真付きで大々的に出ていますが、金塊事件はいっさい出ていません。不思議です。
黄金の「黒ヒゲ危機一髪！」を見てミノリちゃんがなんと言うかタダシ君は身構えていましたが、ミノリちゃんは
「あっ！　黒ヒゲだー！！」

と大喜びしてさっそく遊び始めました。
もうミノリちゃんは「う・・」を卒業したようです。

おしまい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5334f/

黒いサンタ危機一髪！

2010年10月8日15時36分発行